



讀書悲願

大熊信行

人生は旅路たびぢであるといふことは、ふるくて一向ひきたらない。けれども、はじめにさういふことをいひだしたのは、智慧のふかいひとだつたにちがひない。さうして、ふかい實感をもつて、さういつたのにちがひない。だれも知つてゐる日本の讚美歌のひとつに、『旅路のをはり』云々といふくだりがあるが、ひよつとしてヘブライ思想のなかも、そのやうな考へ方があるのかとおもふ。一面、ひじように實際的な考へ方で、人生の行路などといへば、比譬とおもへないほどである。——ロンドンに着いて、はじめて町のまんなかまで出かけてゆくと、芝居のだしものに、*Journeys End*といふのがあつて、ピカデリー界隈の夜のにぎはひのなかに、下題げだのイルミネーションが、だいたい色にかんで旅愁にくもるころをひいた。ネオン・サインなどといふ氣のきいたもんぢやない。一九二九年の夏のことだが、あのさかり場一帯は、きいろい、にぶい電球のつぶで、裝飾されてゐた。さういふ電球の文字が、夜霧のなかで、世界の涯に來てしまつたやうな思ひをしてゐる日本人の眼に映つた。わたしのころは、その下題を日本語に譯して『旅のをはり』と讀んだ。——さうだ、旅はほんたうにをはつたのだ。ここで、ひとまづ旅装をといひ、さしたるあてでもない勉強をはじめなければならぬのだとおもつた。ところで、幾月たつても、ピカデリーの芝居は、依然として“*Journeys End*”をうちつつけてゐる。いつたい、あれはどうした芝居であらうとおもふうちに、評判

がいつとなく耳にはいり、新聞から目にはいる。會話の教師が説明する。わたしが見たのは、すでに數百日うちつづけた翌年の春だつたとおもふが、そのときから、反戰論的色調をおびたこの無名作家の處女上演台本の下題は、わたしのころのなかで、『旅路たびぢのをはり』と改譯された。もちろん生の終焉しうげんといふ意味である。

旅行には見物旅行といふがある。まさに人生は旅路たびぢであるとして、それは『重き荷』をせおうた旅か、それとも見物旅行かといふことになる、事實と解釋のわかれるところであらう。『重き荷』をせおひながらの見物旅行だといつてしまへば、一番まちがひない。だから、いそがしい旅だといはざるをえない。おもふに旅行者といふものは、およそ慾のふかいものである。世界を漫遊して、(といつても、地球を一本の線でぐるんだにすぎないが、) つくづく感じられることの一つは、旅行者の慾のふかさといふことである。もちろん、自分のことは棚にあげていふのだが、日本からヨーロッパへわたる旅行者ほど、慾のふかいものはゐない。みじかい期間に、どこもかしこも、みな見かへらなくては、といふ決心で、血相をかへてゐるのが、いくらもゐる。いはば重々しい義務をおうたも同然で、まはるところだけは、火がふらうが、矢がふらうが、郵便脚夫のやうにまはらなければならぬ。『足跡そくしをのこす』といふことばがあるが、まさしく、猫のやうに足あとをのこすために、かけまはるのだ。豫定のプログラムに、ひとつひとつチェックをつけたいばかりに、——たゞ、あそこも見た、そこも見た、いや、なに一つ見のがしたものはないと、ひとつひとつに告げたいばかりに、そして君は何を見のこしてきたんぢやないかと人にいはれる悔いを、あとあとに残したくないばかりに、いはば見物旅行の眞のたのしみといふものを棒にふつて、義務心とも競争心ともつかない心理に支配されて、貪慾なプランを實行するのだ。あはれむべし、わたしはさういふ日本からの旅行者に、あとからあとから出會つた。

どんなものでも、見おとすまいとする旅行者の心理は、いとしいといへばいとしい、あさましいといへばあさまし

い。またと来る機會もないのだから、こころ残りのないやうに、そして一生の思ひでに、見るだけのものは見、たづねるべきところはたづねておかうといふ心がまへは、もちろん自然である。けれども、それが眞に見たいものであり、こころからおとづれてみたい場所だといふのなら、わかつてゐる。だゞ旅行者の見おとしてはならないところと聴くばかりに、いちいちそれを見おとすまいとする氣もちは、ちつともほめるにあたひしない。むしろ、旅行者にとつて必要なことは、ほんたうに一目見たいところをもつといふこと、——あくがれの目的物や目的地を、一つでもいい、もつといふことである。しかるにヨーロッパにおける日本からの旅行者の多數は、不幸にしてわたしに、漱石の小説『猫』の結論を、たびたび思ひださせた。小説に一つの結論があるわけはないのだが、結論といへば結論であらう。

——得がたき機會は好まざるものをも敢て得せしむ、といふやうな文句である。漱石の猫は、ともかくも死に際（きは）にさういふアフリズムをつかみ、さういふアフリズムをおきみやげに遺して、水がめの底で往生をとげたはずである。あの猫は台どころにおいてあつた客の呑みさしのビールを目撃し、たまたまかたはらに人間のゐないのを見るや、これぞ得がたき機會とかんがへ、全然おのが嗜好に適しないアルコールに口をつけたのである。すなはち酔うて、まんさんとして水を欲し、水がめをもとめ、さかしまに墜ちてしまつた。——わたしは、あんなことにして猫を殺した作者の手際（てぎは）には、ちつとも感心しないし、水がめの中から讀者へおくられた最後のアフリズムにも感服してゐるわけではないが、ヨーロッパにおける日本からの旅行者が、『得がたき機會』を利用すべく血相をかへて駆けまはつてゐるのを見ると、つひ、くだんの猫の金言を、苦笑とともに、おもひうかべざるをえなかつた。

それに、おもしろいことに、日本から笈を負うてヨーロッパに杖をひくひとびとは、ふしぎに墓まわりが好きである。すくなくともわが社會科學の研究者たちは、過去の偉大なる學者の墓にまうでることを、留學生の義務の一つでもあるかのごとく、こころえてゐるふうである。ロンドンのカーライル博物館の訪問者のなかに、いかに極東の日

本人が光彩をそへてゐるか。そして、スコットランドのカコウデーにおけるアダム・スミスの遺跡が、いかに早く日本人の足跡によつて開拓され、イギリスの地方新聞の注意をよびますにいたつたか。——わたしはそれは結構なことだといひたいのだが、どういふもんか、意地のわるい考がうかんできて、くちびるの一端がゆがむのを禁じがたい。

——市中見物の自動車が、グラスゴーのあるお寺のまへでとまると、案内人は聲をあげて、アダム・スミスの墓所といった。同乗のアメリカ人諸君は、もちろんアダム・スミスなんてものには風馬牛である。同様にわたしも、ちよいと首をねぢつてお寺を一瞥すると、また真直ぐにむきなほり、にやりとわらつて、發車をまつべく目をつぶつた。

——『ここにも極東人のお札どころ！ はるばるスミスの墓はおとづれても、スミスの書物のために、あはれ人生の一夜だに割かうとしない日本人留學生がいかに多いことであらう！』

ありていにいふと、日本の經濟學研究者が、例外なく、その藏書熱にもえてゐること、および、その藏書中の古典を讀まうとしないことは、おどろくにたへたるものがある。——かういふと、おのれひとりには藏書熱にうかれてゐず、さうして、いやしくも古典とあれば、なんでも讀みやぶつてゐるかのやうにきこえることであらう。事實はまさに反對で、わたしはつねづね古典に親しむべき一定の氣分と時間とを十分にもてないことを、わが生活のほとんど唯一の悲痛事として考へてゐるものなのである。たゞ、この悲痛事を悲痛事とせず、はじめから古典に親しむことの必要を感じてゐない研究者を見るときに、さすが驚きをおさへがたい。——アダム・スミスは讀む氣がしない、一生讀むつもりはない、といふことばすら、最もまじめな日本の少壯學者の口から、朗々としてわたしの耳に入り、——それはベルリン滞在中のことであるが、三年後のいまでも、夢魔のごとくわたしの念頭につきまとい、消えさらうとしない。どんな信條にもとづいて出てくるにしろ、さうしたことばのひびきのなかには、なんかしら不健康なものが感じられるのである。

そもそも經濟學研究者にとつて、その科學上の古典をきはめることの必要は、創作家にとつて、詩人にとつて、文學上の古典をまなぶことの必要を、はるかに越えてゐるといふはなければならぬ。文學においては、作家は事實上、古典から多くを直接まなぶことなしに、あたらしい作品を生むばあひもあるが、科學においては、——すくなくとも經濟學においては、研究上の眞の業績が過去の遺産と無關係に決定することのできないすじあひのものである。たとへていふなら、經濟學の研究といふものは、描きさしの一枚の肖像畫のやうなものである。さて、その畫面といふのは數世紀以來、あまたの畫家が、おもひおもひに筆をくはへたもので、おなじ肖像を、ますます克明に、いよいよ眞實に仕上げようとして、時にはかへつてへまをやり、畫面を混亂せしめつゝ、最初の畫家の刷毛^{はけ}あととは、すでに、ぬりつぶされたかのごとくにして、しかし結局、依然として全畫面の構圖と色調とを支配してゐるといつたやうなものである。たゞし、肖像畫の對象そのものが、生ける現象であり、發展物であり、變貌をとげつつあるからは、未完成の畫面は未完成のまゝに、もちろん構圖をあらためなくてはならないといふことも事實だ。とはいへ經濟學上のあらゆる眞の研究は、いはば、あたへられた古い畫面に、幾代にわたり、多數の筆によつて、累積的にゑがゝれてきた一定の表現を、さらに深めるべく、あらたに筆をくはへるか、さもなくば部分的な二三の修正をほどこすべく筆をくはへるかの、二途以外に出ないものであるから、これまでの畫面そのものの全貌を見ずるといふことなしには、じつは手の出しやうのないものだといふのが、眞の消息である。古典研究または古典愛といふものは、だから、理論經濟學では、おそらく他の二三の學問における場合とちがつた意義をもつものとおもはなければならぬ。ところで、その古典を神々しく冷たく書棚の最上段に、文字どほり祭りあげておいて、いつも手ちかな新刊書の、月刊雜誌の、帶封を、ペエヂを、きるにいそがしいといふのは、——なんの學者ばかりのことか、およそ讀書人といふものの最大多數が、さうなのである。いつたい、これはどうしたわけのものであらうか？ 新刊書のペエヂをきるのに、いつもい

そがしいといふのは、もちろん結構なことである。わたしは、あらゆる研究者が古典に、へばりついてゐなくてはならんものと、ゆめゆめ思つてはゐない。むしろ古典を忘却することの必要すら、時には痛感するほどである。また、古典の世界から遠くはなれたところに、いきいきとした研究の分野がきりひらかれるばあひのあることすら十分承知してゐる。だが、およそ、この國で學問にたづさはるものは、——すくなくとも經濟學の範圍についていへば、ひとびとは決して眞の科學的作業者として終始してゐるのではない。むしろ、はるかに多くのばあひ、批評的展望家である。經濟學者の大多數は、非常に澤山讀むが、容易に産みださない。——ことはつておくが、讀んだものを手ぎはよくまとめて、紹介祖述してゐるのは、ちつとも科學的生産ではない。科學的生産といふのは、科學そのものの實體を進展せしめることであり、だから、本質上、國內的性質のものではありえないのである。ものを書きさへすれば、すなはちそれが科學者の仕事である、アルバイトである、と信じてゐるやうなのは、單純なる俗見にすぎない。經濟學者の多數は、この國では、みづから生産するよりも、おしよせてくる歐米の生産物を咀嚼することにいそがしく、かなしいかな、それが天性的な鹽力となつて、眞の創造的作業をいとなむべき衝動をうしなつてゐる。だが、一面からみるといまもいふごとく、日本の學者は大いなる展望家であり、みづから作業者としての『重荷』をせおつて、人生の行路をあゆむといふよりも、いはば學問上の『見物旅行者』として、大いに書をあさるといふ境地に、満足と喜びをみいだしてゐるおもむきがあり、——だから、みづから科學的作業にあたるといふよりも、はるかに泰西の學者たちの作業ぶりをながめ、その業績の一部を、日本語をもつて祖述し、あるひは程よき批評をそへておくといふやうなことがこの國における『科學者の任務』であるかのごとく考へられてゐるのである。——しかり、それならそれでも、まあ仕方がないとして、その好學の士が、一生の行路のプログラムのなかに、古典のために割くべき月日を算入してゐないといふのは、いよいよ不思議なことだといふ氣がする。

わけても、あらゆる種類の読書人である。ヨーロッパにおける日本からの旅行者が、ほとんど例外なしに示すところのあの貪慾を、なぜ読書人はもたないのであるか？ おなじ人間がヨーロッパ旅行者としては、意地ぎたないほど慾ばつたプログラムをつくり、さあ何ひとつ見のがしたものはないぞといつて、ゐばつて旅行を了へてくるのに反し、人生の旅行者としては、逆に、おそろしくでたらめで、無計劃で、一年はおろか、一ヶ月にわたる読書のプランすらあるかなしで、あたりばつたりに書物を取りあげ、おちついて考へたら、読みおとしてならないはずの古今の名著を、いづれもあとまはしにして、月々の雑書や雑誌のあひだに視界をせばめ、いはばローマも、エジプトも、ロンドンもバリも、ヴェニスも、みんな斷念して、つまらぬところをのみ、さまよひあるく旅行者のやうに、——いや、そんな旅行者といふものは實際ありはしないが、人生の長旅^{ながたび}では多くのひとびとが、そんな旅行者になつてしまつてゐるのである。經典、科學、文學、歴史ないし傳記とかぎるのでない。およそ世界的な不朽の著作物の日本語に移植された幸福なる蓄積をおもひうかべるとき、それらの一定數を往見すべきプログラムを、またと來る機會のない旅程のなかに、くはへたくなるのは、ねがはくは『こころ残り』のないやうにといふ人生の悲願であつて、旅行者の例の貪慾として、しりぞけらるべきものではない。その讀書悲願こそ、ゆかしいのである。